

一般共同研究プロジェクト

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

2009年度第2回研究会

日時： 2009年4月18日（土）午後13:00～18:00

場所： AA研セミナー室（301）

報告：

1. 西川和孝氏（中央大学大学院）

「明清時期雲南省石屏盆地における漢人移民の耕地開発一官による水利事業と科挙合格者の増加を中心として一」

2. 新谷忠彦氏（AA研所員）

「『民族』再考—最近の調査から」

研究会開催の趣旨

南下した漢族がタイ文化圏に入植してきたことは周知の通りです。地域によっては入植した土地柄が異なっています。一般的な傾向として、漢族は山地に定着しましたが、中国の雲南省内では盆地平野で耕地を開拓する場合があります。漢族による盆地の開拓は中国王朝の直轄地においてみられる現象であり、タイ系民族の統治下にある地域では知られていません。しかし、漢族がどのような手段で盆地を耕地に作り変えたのか、開拓は民間主導型なのか、国家主導型なのかをはじめ、その歴史過程の実像はまだ不明です。この度の研究会では、この問題を検討課題に据え、西川和孝氏に、雲南省石屏盆地の開発という具体例から、漢族移民と明清王朝の国家権力の役割について発表して頂くことになりました。

また、2010年3月末AA研を「刑期満了にて出所」する新谷忠彦所員に、現地における長年の観察と実地調査によって得られた資料に基づき、タイ文化圏における「民族」についての最新の考え方を披露して頂くことになりました。これは2008年10月18日に行なった「言語学、歴史学、文化人類学の接点を探る」と題する発表の第二部です。（唐立）

報告の要旨

1. 「明清時期雲南省石屏盆地における漢人移民の耕地開発一官による水利事業と科挙合格者の増加を中心として一」

漢人移民の雲南への進出は、14世紀の明朝の進出を契機に始まり、人口爆発に伴う大量の漢人移民の流入を迎えた18世紀末にそのピークに達した。従来、雲南の移民史において、雲南省外の他地域から移住してくる漢人移民の動向に焦点を向けるあまり、省内における移住への動きについてはほとんど省みられてこなかった。本稿では、石屏の事例を通して、こうした一方的な議論に対して別の見方を提示する。

石屏盆地では明代に屯田が設置されたことをきっかけに漢人移民が入植し、官主導による耕地開発が始まった。この際に官側は、(1) 貯水池灌漑 (2) 水車利用による灌漑 (3) 囲田といった水利技術を活用し、治水工事と合わせて、耕地面積を拡大していった。その結果、石屏では人口増加が引き起こされ、移住へとつながる環境が整えられたのである。さらに官は、耕地開発で得た経済力を背景として人材の育成を目指し、教育施設の充実を図った。官主導の教育の普及と耕地開発の恩恵が民にも及んだことで、民間経営による私塾が登場し、優秀な人材を多数輩出するようになった。彼らは科挙に合格し、官吏として全国に散っていただけでなく、教師としても周辺地域から招聘を受けた。そして、こうした人々が地縁を中心としたネットワークを構築することで移民活動の一助となった。すなわち、石屏盆地において、官の水利事業による耕地面積の拡大が、人口増大を可能にし、民が移住する社会的環境を作り上げたのである。

雲南の移民史を論じる上で、これまで指摘されてきたような他省からの移住という視点だけでなく、石屏盆地の事例の如く、雲南省内の耕地開発が発端となり、地元社会内部から移住へとつながる動きが生じてきたことにも目を向けるべきであろう。(西川和孝)

2. 『民族』再考—最近の調査から

「民族」という概念はきわめて相対的なものである。このことを理解していないと「民族は存在する」、「いや、民族は存在しない」というような不毛な論争に陥ってしまう。タイ文化圏においては「民族名」は国家によって登録されている。このこと自体はきわめて政治的なものであるが、こうした登録の仕方がこの地域の社会構造の反映でもあると考えられよう。この地域の「民族」区分の経緯を見てみると、ある集団のアイデンティティを基に区分したというよりも、当該集団の社会における役割によって区分されている傾向が見て取れる。一方ヨーロッパに目を向けてみると、「民族」なるものが強烈に自己主張することはよく見られることであるが、国家が民族名を登録しているところはどれだけあるだろうか。きわめて少ないであろう。このようなアジアとヨーロッパの「民族」の概念の違いは、その思考様式の違いによるものと考えられる。ヨーロッパで発達した音韻論と中国の等韻学、植物学と本草学、科学と技術など全てこうした根本的な思考様式の違いに由来するものと考えられる。

ヨーロッパ人にして始めて「民族」の概念がヨーロッパとアジアでは異なることに気がついたのはおそらく E. R. Leach が初めてであろう。言語や宗教は「民族」を規定する指標にはなりえず、所属する政治組織が重要だとする。このことは非常に重要な指摘であるが、同時に、彼には誤解していたことが一点あったように思う。

現在 Leach が調査した地域で実態を確認することは不可能であるが、近年ラワン系の言語を調査する過程で、カチン社会に gumlao, gumsa の二つの政治組織があったのは、Leach の誤解ではないのかと考え始めている。Leach が gumlao 組織を持つ、といったカチン社会は存在せず、カチン社会は全て gumsa 型組織を持つ社会で、gumlao 型組織を持つ

ものは全てラワンではないのかと思えるような事実と直面することになった。マル、ラシ、アツィー、ゴーチャン、リスは緬甸語のあまりできない人に遭遇することはたまにあっても、ジンポ語のできない人に遭遇したことは一度もない。それに対し、ラワン系のグループでは緬甸語もジンポ語もあまりできない人に結構めぐり合っている。ラワン系グループの一部がカチン社会に組み込まれているところから Leach のような誤解が生じた可能性がある。カチン社会はシャン社会（タイ社会）と極めて似たところがあり、それぞれジンポ語（カチン語）、シャン語（タイ語）がリングフランカとして通用しており、ジンポ及びシャンは他の言語をしゃべらない。又、それぞれの社会に含まれる集団も言語系統から見れば疎遠なグループも含まれている。

タイ文化圏の中で北方モンクメール系のグループとして、パラウン、ワ、プランと呼ばれる三つのグループがあるが、パラウンはワの存在は皆知っているが、プランの存在はまず知らない。このことはパラウンがサルウィン系タイ社会に組み込まれているのに対し、プランはメコン系タイ社会に組み込まれているからではないだろうか。（新谷忠彦）

3. 質疑応答

西川氏の報告については、質疑応答が主に二つの方面に集中した。一つ目は、耕地開発→人口飽和→移民創出という論の建て方に関してであった。石屏盆地では官側がそもそも水利事業を実施した動機は何であったのか、人口増加以外の要因にも目配りする必要があるといった質問が複数の共同研究員から出された。例えば、湖南省などで清朝の官僚によって行われた開田造成は、水田面積を拡大して他地方へ米穀を移出するための事業であったことが知られている。石屏盆地において、水利事業の動機が米穀増産だとすれば、それが商業目的によって実施されたかどうかといった視点から再検討したらどうか、との提案が武内房司共同研究員からあった。二つ目は、耕地開発の技術に関してであった。耕地開発を論ずるならば、土質について言及する必要があるのではないかと、また、その開発過程は図で表示できないかといった質問が出された。

新谷所員に対する質疑は、本日の報告のみならず、2008年10月18日の第3回研究会で同所員が発表した「言語、歴史学、文化人類学の接点を探る」の内容にも及んだ。新谷所員が提示するパラウン、プラン及びワ系民族の分化説について活発な議論が行われた。パラウン族、プラン族及びワ族の相互認識、この三民族間の言語距離や、タイ系民族の到来によってパラウン族とプラン族が分化していった等、新谷所員から提唱された新説に対して多方面から質疑応答があった。また、カチン社会が階層的・専制的なグムサ型と民主的・平等的なグムラオ型という二つの支配原理によって統治されたとする E.R.リーチの有名な学説に対して新谷所員は異論を唱え、それとは別のカチン社会像を提示している。異論の根拠やカチン社会の構成について議論が交わされた。最後に、カレン＝ピューという仮説に関して新谷所員から今後の見通しについて語ってもらって閉会となった。（唐立）

